

舞姫（森鷗外）

河邊 建、小林 大希、永安 聡子、帆足 憲和



一 作者と作品について

森鷗外（一八六二～一九二二）は、小説家、翻訳家、陸軍軍医である。石見国の津和野町の出身で、亀井藩の典医の家に生まれた。一八八四年から八八年までドイツに留学して衛生学を学んだが、ヨーロッパの文学や哲学に大きな影響を受けた。帰国後に留学時の体験を踏まえて書いたのが「舞姫」である。

鷗外の作風は、前期の浪漫主義（「舞姫」など）から、後期の歴史小説（「阿部一族」など）や反自然主義文学（「高瀬舟」「最後の一句」など）に変化した。前期作品から後期作品までの間に十八年の作家としての断絶がある。

「舞姫」は鷗外の初めての小説である。明治三三年『国民文学』に発表した。主人公太田豊太郎は法律研究のためにベルリンに来た青年だが、鷗外の経験を素材として考えると考えられている。本作品に登場するエリスは、その後、鷗外を追って渡日してきたとされ、その一部は『普請中』にて述べられている。

二 叙述について

今宵は夜ごここに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残

れるは余一人のみなれば。

「夜ご」とあるので、普段は毎晩誰かが部屋にやってきているが今日は珍しく一人で過ごしているということがわかる。「のみなれば」の後には、「いと静か」という言葉を補うことが出来ると考えられる。

五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴンの港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆にまかせて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、をさなき思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。

「平生の望み」とは、洋行の官命を受けることであり、それが長年の夢であったことが読み取れる。「一つとして新たならぬはなく」とあることから、五年前にセイゴンの港まで来た時の豊太郎は欧州のことを何一つ知らなかったということが読み取れる。「紀行文日ごとに幾千言をかなしけん」とあるから、日々膨大な量の新しいものに触れていたと考えられる。「当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、をさなき思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心あ

る人はいかにか見けん。」の部分から、当時認められた彼自身の思想や発言を今になって振り返ってみると、考えが浅く感じられ恥ずかしく思っていると推測される。また当時の自分が当時の良識ある人々からどのように思われていたのか気にしていることがわかる。

こたびは途に上りし時、日記ものせんとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸にて学びせし間に、一種の「ニル・アドミラリイ」の気象をや養ひたりけん、あらず、これには故あり。

「日記ものせんとて買ひし冊子も」の「も」から、五年前は毎日のように書いていた紀行文を現在全く書くことが出来ていないということが読み取れる。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世のうきふしをも知りたり、人の心の頼み難きは言ふも更なり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。

「げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず」から、昔の自分と今の自分には大きな変化があることがわかる。留学の結果、学問はまだまだ満足できていないが、それ以外の様々な事柄を学んできたことが読み取れる。

きのふの是はけふの非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せん。「筆に写して誰にか見せん」とあることから、他人に自身の内面の変化について知られたくないと考えていることがわかる。

この恨みは初め一抹の雪のごとく我が心をかすめて、瑞西の山色をも見

せず、伊太利の古蹟にも心をとどめさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るとごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を喚び起こして、幾たびとなく我が心を苦しむ。

「初め……我が心をかすめて」が「今は心の奥に凝り固まりて」に変化していることから、豊太郎が抱えている恨みの念がより強大になっ
ていることが読み取れる。また、「かげ」という漢字が「影」でも「陰」でもない、「翳」という漢字になっている。「翳」には、「人目に隠れた暗い面、かげり」という意味がある。この文での豊太郎の人目に隠れた暗い面とは、「この恨み」のことを指している。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。

「模糊たる」とあるので、豊太郎は独逸に来て確固たる自信や気概のないまま、当時の政治経済の中心地に降り立っている様子がわかる。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来たれば包みても包み難きは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりとはげますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなくおだやかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。

「嬉しさ」「喜ばしさ」とは、「人の神童なりなど褒められたことや「官長の善き働き手を得たりとはげま」されたことに對するものである。母の教えや官長の命令に従つて仕事をすることは、法学ではなく歴史学をまなびたいという自分の本心に反しているが、たとえ受動的・機械的な人間になつても人に喜ばれ褒められることが嬉しかったのだということがわかる。「まことの我」は本心の自分を、「きのふまでの我ならぬ我」は本心を隠して生きてきた自分を指している。したがつて、器械的に言われるがままに喜んで働いていたのは独逸に來てから三年間だけのことで、今となつてはそんな風に働いていたかつての自分を悔いていることがわかる。

これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閱し尽くす媒なりける。

「これ」は自分に勇氣が無いこと、「冤罪」は同郷の人々に妬まれること、「無量の艱難」は妬まれることによつて生まれる苦しみを指す。

この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、なにゆゑに一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

「一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか」とあることから、一瞥しただけで強く心の奥に残るほどエリスの容貌が美しかったということがわかる。

人の見るが厭はしさに、足早に行く少女のあとにつきて、寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯をあり。

エリスが足早に先を歩き、その後ろを豊太郎が付いて行つていくことから、エリスが東洋人と一緒に歩いているところを見られたくないという思い（「人の見るが厭はしき」を抱いており、そのため自然と家路に向かう足取りが早くなつていふのだと考えられる。

さきの老嫗は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。

「無礼の振る舞ひ」とは、エリスたちを助けるためにやつてきた豊太郎を迎え入れず、「戸をはげしくたて切」つたことを指す。

この時をはじめとして、余と少女との交はりやうやく繁くなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。

「彼ら」は同郷人を指し、「色」は愛情の対象たる人を指す。身分が低い踊り子を誘惑するような低俗な人間だと同郷人に思われていることがわかる。

余とエリスの交際は、この時まではよそ目に見るより清白なりき。

「この時までは」とあることから、これから先は状況が変わつてくることが予想される。

我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしを怪しみ、また誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、はじめて相見し時よりあさくはあらぬに、今我が数奇を憐れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛に解けてかかりたる、そ

の美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。

「我が一身の大事」とは、公使から旅費を貰つて日本に帰るかどうか決断する日が近づいているということであり、「この行ひ」はエリスとの逢瀬を指している。また「我が教奇を憐れ」んでいるのはエリスであり、「悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる」は「脳髓」を修飾している。したがって、この一文から豊太郎が自身の今後を決める重要な選択を差し置いてしまうほどに、エリスに対しての深い愛情をもっていることが読み取れる。

幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるをも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道のみ走りし知識は、おのづから綜括的になりて、同郷の留学生などのおほかたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。

「今まで一筋の道のみ走りし知識」とは、大学でかつて学んだ知識を指す。また「高尚なるをも多きを」という部分は逆接である。「高尚なる」という言葉はプラスの意味をもっているので、それ以降に描かれている豊太郎自身のことに関しては、客観的に見るとマイナスイメージであることが推測される。

彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

「だに」から、新聞ですら読むことができない同郷の留学生たちを見下し、本来ならば自分は彼らよりも上の立場に立つことができるはずであるのにと悲嘆している。

嗚呼、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もし真なりせばいかにせまし。

「さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに」は、免官になり安定した収入を得ることができず困窮していることを指し、その上エリスが妊娠していることが真実であるならばどうしようもないと思つている豊太郎の苦悩が読み取れる。

「なに、富貴。」余は微笑しつ。

富貴になどなるものかという、豊太郎の皮肉があらわれている。

室に入りて相對して見れば、形こそ旧に比ぶるが肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。

「肥えてたくましくなりたれ」から、相沢が豊かな生活を送っているであろうことが読み取れる。また「我が失行」は、エリスにうつつをぬかして留学生としての本分を全うせず免官になったことを指すと考えられる。

またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の情性より生じたる交はりなり。

「慣習といふ一種の情性より生じたる交はり」から、たまたま出会ったというだけで付き合い始めたのであり、もし出会ったのがエリスでなければその女性と付き合い合っていたのではないかと相沢が推測していることがわかる。

されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果たして往きつきぬとも、我が中心に満足を与へんも定かならず。

「この山」は前文の「はるかなる山」、つまりエリスとの関係をきっぱり断ち、名声を取り戻して成功することを指す。けれどこの山に辿りつくための道は「重霧（＝エリス）」によって阻まれていた。霧は目の前の景色をぼんやりさせ、自分の力では晴れさせることができない厄介な存在である。エリスをそのような霧にたとえることにより、エリスという存在の厄介さや、豊太郎が自分の出世を阻む邪魔な存在ととらえていることが読み取れる。

我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。

「我が弱き心」はエリスを取るか仕事を取るかを迷っていることを指し、どちらかを選ぶために必要な確固たる理由も特になければ、友人であり信頼している相沢が言うままにエリスとの関係を断つことを約束してしまう。人に言われるがままに行動してしまう豊太郎の心や信念の弱さがここにも表れている。

さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行くあとに残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんにはうしろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。

「心細きこと」はエリスが妊娠していること、生活にも困るほどお金がないこと、そんな状況でエリスを置いてロシアへ行くことを指す。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき。

「え忘れざりき」とあることから、ロシアに滞在している間くらいはエリスを忘れようとしたが、毎日欠かさず手紙を送ってこられたことで、どれだけ忘れようとしても忘れることができなかったのだということが読み取れる。また「彼は日ごとに文を寄せ」とある。もし豊太郎がエリスの手紙に対して返事をしていざすれば、その手紙を受け取ってから返事を書くため次の手紙が届くまでに日が空くはずである。しかしここでは「日ごと（毎日）」とあるため、エリスから一方的に手紙が送られてくるだけで、豊太郎がその手紙に対して返事することはなかっただろうことが予想される。

否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。

「底」というと、豊太郎に対する愛情に限りがあり浅い、のではないかと考えられるが、それだと文章の意味が通らなくなってしまう。そのためこの文章での「底」は、豊太郎に対する愛情がどれだけ深いのか今までは分からなかったが、何日も離れて暮らしたことで愛情の深さが非常に深かったことに気づいた、ということだと解釈をした。

嗚呼、余はこの文を見てはじめて我が地位を明視し得たり。

「地位」とは、エリスや生まれて来る子どもに対して負わなければいけない責任から逃れることはできないのだという状況を指す。

恥づかしきは我が鈍き心なり。

「我が鈍き心」とは、エリスからの手紙を読んだつた今まで彼女の気持ちに気づいていなかったことを指す。エリスは手紙の中で、もし豊太郎が日本に帰国するなら自分もついていこうと考えていること、そのことについて母親はすでに説得済みであること、日本への旅費をどのように捻出するかなどについて述べており、エリスの頭の中では豊太郎との将来についてのプランが完成していることがわかる。豊太郎は手紙を読んで初めてそのようなエリスの気持ちや決心に気づき、今まで気づかなかった自分を恥じていると考えられる。

余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境のみにありて、逆境にはあらず。

自分自身に関すること・他人事については、万事が都合よく運んでいる状況の中であれば冷静に決断を下すことができるが、自分の思うようにすすまない状況では追い詰められ何事も決断することができないという豊太郎の心の弱さが表れている。

我と人との関係を照らさんとする時は、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

自分自身に関することならば決断することができるが、自分と他者の双方についての決断を下すことができないことがわかり、前の一文と同じく豊太郎の心の弱さを読み取ることができる。「照らさん」「曇りたり」は「鏡」に合わせた表現となっている。

嗚呼、独逸に来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また機械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動

かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。

元々有能であることは折紙付で、その上他人から言われることに逆らわず何でも言うことを聞く豊太郎は、上司にとっては都合のよい部下である。そのため豊太郎自身が「機械的人物にはなるまい」とどれほど心に決めたとしても、上司は豊太郎の性格をうまく利用して操るので、何度上司が変わっても状況は変化することはない。

彼が一声叫びて我が項を抱きしを見て馭丁はあきれたる面もちにて、何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず。

「一声叫びて」とあることから、エリスが久しぶりに豊太郎と再会できた嬉しさでいっぱいだということが読み取れる。また「馭丁はあきれたる面もちにて、何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず」の部分から、再会に感動しているエリスに対して、他人からあきれた目で見られていると気づくことができるほどに豊太郎は冷静であることがわかり、エリスとの再会をあまり喜んでいないと考えられる。

彼は頭を垂れたり。

豊太郎との間に子どもが生まれることを楽しみにする一方で、豊太郎が自分たちを捨てて日本に帰ってしまうのではないかという不安から、顔を伏せてしまっている。

見上げたる目には涙満ちたり。

頭を垂れたまま、目だけを豊太郎に向かって上げている状態である。涙で満ちた目で豊太郎を見つめることで、「自分たちを見捨てないでほしい」と言葉では言わず、無言で自分の気持ちを必死に訴えている様

子が読み取れる。

あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらば、本国をも失ひ、名誉をひきかへさん道をも断ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。

「相沢の言を偽りなりとも言ひ難き」という部分から、豊太郎がいかに相沢を頼り心酔しているかがわかる。また、「もしこの手にしもすがらば」とあるので、今回が名誉挽回をして人生をやり直すための最後のチャンスだと考えていることが読み取れる。独逸に来てから豊太郎は仕事や信頼など様々なものを失ってきたが、もし今回のチャンスを逃せば更に日本に帰ることができなくなり、名誉挽回もできなくなる。それほど豊太郎は追い詰められた状況に置かれている。

相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

「日々の生計には窮せざりし」とあるので、生活に困らないだけの生活費を援助してもらっていたことがわかる。しかし「精神的に殺ししなり」の部分から、美しかった容貌がひどく変わるほどの精神的なショックも相沢から与えられたことを読み取ることができ、皮肉的な意味をもって相沢を「この恩人」と呼んでいると考えられる。

後に聞けば彼は相沢に逢ひし時、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえあげし一諾を知り、にはかに座より踊り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたま

ひしか。」とて、その場に倒れぬ。

「かくまでに我をば欺きたまひしか。」とある。エリスを置いて日本に帰るか、あるいはエリスと暮らし続けるかの選択について、豊太郎はエリスに対して一度も「ドイツに残るから大丈夫」などと嘘をついていない。それなのになぜエリスは豊太郎に欺かれたと言ったのだろうか。豊太郎がロシアに行っている間にエリスが送った手紙の中に、豊太郎との将来についてエリスが語っている部分がある。おそらくエリスは、豊太郎とまもなく生まれて来る子どもとの生活の計画を立てたり、子どものおしめを作ったりする中で、その計画が豊太郎と約束した事柄であるかのように思いこんでしまっていたのではないだろうか。そのため、実際には豊太郎は自分と子どもを捨てて日本に帰ってしまうと相沢から聞かされた際に、豊太郎に嘘をつかれつづけていたと感じてしまったと考えられる。

されど我が脳裡に一点の彼を憎むころ今日までも残りけり。

「一点の彼を憎むころ」とは相沢を憎む気持ちを指す。ではなぜ豊太郎は心酔していたはずの相沢を憎むようになってしまったのか。豊太郎は相沢にエリスとの関係を断つことを約束していたが、豊太郎はエリスを捨てることができず自分の口から「別れよう」とエリスに伝えることもできず苦しんでいた。そして豊太郎が意識不明になっている間に、エリスは相沢から事の真相を告げられ、ショックのあまり精神に異常を来してしまう。エリスを精神的に崩壊させた相沢本人を恨んでもいるだろうが、それ以外にも、自分の意思で、自分のタイミングでエリスに真相を伝えることができず、全て自分の知らない場所で物事がすすんでしまったことも、相沢を憎むころの中に含まれて

いると考えられる。

三 考察

(一) エリスと豊太郎が惹かれた理由

舞姫の中で、主人公である太田豊太郎は、学問のために海を渡った。しかし現地の女性と出会い、互いに惹かれあつたことで、豊太郎の運命は大きく変わっていく。今でこそ、よくあるとまでは言わないが、普通に見られる異国間の交際はなぜ起こつたのか。独逸に住むエリスは、東洋の島国から来た青年のどこに惹かれたのかを考えたい。

豊太郎が独逸で恋におちた女性がエリスである。年は十六、七歳位ではないかとある。豊太郎が日本を出発したのが二十二歳の頃、そこから三年が経ち、現在二十五歳という記述がある。今とは考え方も違うだろうが、年の差カップルである。豊太郎がエリスと出会つたのは、ある日の夕暮れであつた。豊太郎が獣苑を散策した帰りに、古寺の前で忍び泣くエリスを見たのである。その頃の豊太郎は、自らも「交際の疎き」と述べているように、周りの留学生となかなか打ち解けられずにいた。他人と活発に交流をするということが出来ずに、いわゆる仲間はずれの状態になつていたのである。ところが、そんな豊太郎が、異国の地で、若い女性に声をかけたのである。この時のことは、「我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて……」と述べられている。もちろん人の目のあるところで泣く少女に憐れみを覚えたことも大きな一因ではある。しかしそれ以上に、エリスの愁いを帯びた青い目、長い睫毛に豊太郎は惹かれたのである。この時から二人の運命は始まつた。かたやエリスは、父親をなくし、母親からはお金の為にエリスをシ

ヤウムベルヒの愛人になるように言われていた。踊り子をしているとはいへ、十代の少女にとつては、非常に辛い出来事である。元来エリスは学問については積極的な姿勢を見せている。父親が貧しかったことから、十分な教育を受けることはままならなかつた。しかし一方で、「コルポルタージュ」と呼ばれる貸本屋の小説を読むことを好んだという記述もある。おそらく父親にもエリスには好きなように学ばせてあげたいという思いがあつたのではないか。しかしながら、家庭の経済事情としてなかなかそういうわけにもいかず、断腸の思いで送り出していたのではないか。そうは言っても、踊り子という当時の最下層の職に就いていたエリス。そんなエリスを守ってくれていた最後の柱である父親を亡くしたことは、経済的にも、精神的にも十六、七歳の少女の心に大きな穴を空けてしまつたわけである。その穴を埋める存在となつたのが豊太郎である。シャウムベルヒのように、なにか弱みに付け込むということ無しに経済的な援助をしてくれた。またその後ではあるが、自分に本を貸してくれたら、言葉を教えてくれたりした。このことから、精神的にも、それまでの父親の役割を豊太郎が担つていたのでないかと考える。

つまり、豊太郎はエリスのその外面的な美しさに本能的に惹かれ、エリスは、経済的な面で支援してくれたこと、それまでの父親の役割を豊太郎が補ってくれたことに惹かれて、二人の愛は深くなつていったのではないかと考えられる。現代でも女性は最終的に父親のような男性に惹かれるとよく言われるが今回のエリスもまさにそれではないだろうか。なお、グループでの議論の中では、エリスにとつて豊太郎はパトロンのような存在だつたのではないだろうかという意見も出た。

(二) 揺れ動く豊太郎の心情

豊太郎の心は学問からエリス、立身出世へと行きつ戻りつしつつ、次々にその方向を変えてゆく。結果として優柔不断がエリスの人生を狂わしてしまうまでに至る訳だが、これについては当時の日本の価値観を考慮に入れたとしてもいくらかの人々から非難を受けてしまう所だろう。まずはドイツに赴いてからの豊太郎の心の動きを整理する。

- ① あだなる美観に心をば動かさじの意ありて：
- ② 歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗を噛む境に入りぬ。
- ③ 用心深き我が心の底までは徹したるか。
- ④ ついに離れ難き仲となりし：
- ⑤ さらにぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに：
- ⑥ 「なに富貴。」
- ⑦ この情念を断たんと約しき。
- ⑧ この一刹那、低徊踟躕の思ひは去りて：
- ⑨ 「承りはべり。」

国のエリートとしてドイツへ国費留学した豊太郎は初め、周囲のあらゆる誘惑に目をつむりその役割を果たす決心をする。その決心は自我への目覚め、本人のいう器械的人物からの脱却への渴望、また他の留学生との疎遠な関係によって崩れ、「獣苑」「古寺」「遺跡」等当初見向きもしまいと決めていたことよって心を慰める状況に至る。

そのような偶然エリスと出会い彼女に心を奪われる。エリスと交際を続けているうちに、豊太郎の「免官」という問題が起こってしまふ。彼の心がエリスと立身出世の間で揺れ動く最初のできごとである。

ここで豊太郎は日本に帰国するかどうかという決断を迫られるが、④にあるように既に二人は、少なくとも豊太郎にとっては、エリスは手放すことのできない存在となっていた。息子のこのような形での免官という無念の中で死んでいっただろう母を思いながら、そしてこの機を逃すと日本に帰ることができなくなるかもしれないと言う思いの中、豊太郎はエリスを選ぶ。

そして友人相沢によつてその場を凌げる程度の仕事を紹介してもらうこととなるが、またエリスの妊娠という大きな問題が発生する。⑤のように豊太郎は金銭の面で悩みをかかえる事となるも、同時に大臣との面会という場をまたしても友人相沢によつて設けられ、出世の機会を得る。しかし母と祖国を捨ててまで選んだエリスとの生活、⑥の台詞にあるように今さら出世など望むべくもなく、「ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け」という心持で天方伯、相沢との面会に豊太郎は臨むこととなる。

今まで様々な問題に振り回されながらもエリスとの生活を選んできた豊太郎であるが、この面会后、⑦相沢との昼食にて軽率にも「エリスと関係を断たん」と約束してしまう。ここで注意すべきことは、豊太郎自身がその約束を「軽率」であったと判断しているように、心情としてはエリスと別れるつもりはなかったであろうということだ。彼の行動だけを見るとここで彼の出世への意志が見られるようだが、ここまで自分を支えてくれた相沢という友人に対して「否とはえ対へぬが常」であつただけである。また豊太郎はこの相沢との昼食後、大臣から受けたロシアへの同行に関しても「当時のころうつろなりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを実行」したにすぎないのである。自分の行動を「軽率」と反省しながら心はエリスへ向いていたと考えられる。

しかしこのロシアへの同行中、エリスからの手紙によって豊太郎は「我が地位」を明視することとなる。つまり彼女と子どもをこれから養っていかねければならない立場にあるということである。この時点で豊太郎はエリスと出世のどちらかを選ばざるべきなのか迷い始めることとなる。「出世」と述べたが、豊太郎の心情からするとこの表現は正確なものではないように思う。豊太郎はドイツにいる間、二回金銭面での問題を抱えた。一つ目は彼自身の免職によるもの、二つ目はエリスの妊娠である。一回目の問題は相沢による職の紹介によって免れることができた。豊太郎はこれと同じように二回目の問題も相沢の紹介した職、つまり天方伯に用いられることよって解決できるのではないかと考えたのではなからうか。しかし二回目の解決策は、生活のための資金を得ると同時に日本への帰国を迫ることになるものであるということをも、「我が近眼はただ己が尽くしたる職分のみ見き」とあるように豊太郎は気づいていなかったのだ。この時点での豊太郎の選択肢は「ロシアにおいて孤独な日本人としてひとり、エリスと自分達の子どもを養っていく。(一家で路頭に迷う可能性も十分に有る)」か「エリスを連れて(あるいは捨てて)職もほぼ確実決まっている日本に帰る」この二択であったらう。しかし後者は天方伯に「さまざまの係累」はないと相沢を介して断っている以上「エリスを連れて」ということは難しかった。「さまざまの係累」はないと言い切っていたのも、そうしなければ手にした職を逃すことにつながる可能性があったからであり、そうなれば当初の生活費の工面という目的が果たせなくなる。そして生活費の工面という目的を果たすためにはエリスとの生活を捨てなければ為らないという二重拘束に豊太郎は陥っていたのだ。

そして現実的にはどちらを取ること、どちらかを取ることとも許さ

れない状況の中で⑧、⑨にあるように豊太郎は両者に対して自分の心に誠実な行動を取る。結果として最終的に日本へ帰ることを選んだ形となっているが、これはどちらかを選び取った結果ではない。ロシアからの帰国前にこの決断をしていたとしても、豊太郎は「低徊踟蹰の思い」を振り払ってエリスを抱きしめたものではなからうか。つまり、⑧、⑨はただ偶然その順序を得ただけであり、豊太郎はその心情として両方を選択していたのではないだろうか。

石橋忍月との論争の中で鷗外はこのように述べている。「又エリスが狂を発することもあらで相語るをりもありしならば、太田は或いは帰東の念を断ちしも亦知るべからず。」エリスが発狂しなかったならば豊太郎はエリスを選んでいたかもしれないということだ。

豊太郎の行動はエリスと出世との間で揺れ動く彼の感情を表しているかのように見えるが、実際は「出世」へのこだわりはなく、豊太郎のエリスへの想いは最後まで一貫したものであったと言えるのではないだろうか。どうしようもない状況が生んだ悲劇について反省する、豊太郎の道徳性を責めることはできない。

(三) 鷗外が「舞姫」を執筆した背景

鷗外はなぜ「舞姫」という作品を執筆したのだろうか。このことに関して、結論を端的に述べてしまえば、二つの理由が挙げられる。まず第一の理由として、「鷗外自身の自由を抑圧したものに對する反発」が挙げられる。続いて、第二の理由として、「妻登志子との離婚への伏線」といったことが挙げられる。以下でその理由を考えていきたい。

そのための前提として、「舞姫」の登場人物である太田豊太郎という人物は、森鷗外(本名 森林太郎)と同一視することが可能だとい

ことを確認しておきたい。このことに関して、今回は深く説明することとはしないが、鷗外自身も日本人初の留学生として洋行をしている点、エリスのモデルとして、エリーゼ・ヴィーゲルトという人物が浮かび上がっている点、田中実氏『舞姫』背景考』において、「舞姫」という作品において鷗外は自らの秘事を暴露したという旨の記述がある点からこの考えが妥当であることが予想される。

ではまず、二つの理由に共通する部分から述べていく。正確な日付は定かではないが、鷗外が帰朝した後の九月十八日、先に述べたエリーゼ・ヴィーゲルトが来日し、鷗外のもとを訪れている。その際、鷗外の家族が全員で彼女を追い返したという記録が残っている。そして、進行中であつた赤松登志子との縁談を急を要する事案とし、鷗外を赤松登志子と結婚させているということがそれにあたる。

ここから、第一の理由について考察していく。まず、「鷗外自身の自由を抑圧したもの」が何であるかということについてだが、これは、「官僚体制」である。先に述べた赤松登志子との結婚を推し進めた人物には、鷗外の家の人物に留まらず、西、石黒、林などといった当時の有力者なども含まれていた。そして、この結婚の背景には、次代の軍医学界指導者であるとともに、「陸軍衛生教程」の執筆者でもある、現今医学界の先導者森鷗外の「秘事（エリスとの関係）」により危うくなりかけていた立場を保全するという意図があつた。そのようにして守られた彼自身の立場を再度自ら危うくするために、鷗外は「舞姫」を発表した。これは、有力者への反発・裏切り、つまり、当代の社会体制への反抗ということになるのではないだろうか。

続いて、第二の理由について考察を行う。鷗外は「舞姫」の朗読会を機会があれば行っていた。妻登志子に対しては、一度として読んで

聞かせた形跡は残っていないという。だが、登志子は決して「舞姫」を読まなかったというわけではない。登志子自身、それ以前から「誰から聞いたかはわからないが西洋婦人既にエリスと呼んできた女性のことを気にしていた」との記述がある。そして、そのようなことを気にしている最中、「舞姫」が発表され、一読すれば、それが自分の夫と見知らぬ西洋婦人の悲恋物語であることはわかるものであつた。このことがきっかけとなり、元々上手くいってはいなかった夫婦間の不和の激化は避けられないものとなつた。しかし、鷗外がこのことを予測せずに「舞姫」を発表したとは考え難い。そのため、「舞姫」発表は、登志子と自分との間に一悶着起こし、一種離婚への伏線、ないしは予告としての発表だつたのではないかと考えることができる。

また、その登志子との離婚も、言い換えてしまえば、「官僚体制への批判」と捉えることができるだろう。もともと、登志子との結婚も赤松家との門閥のために為されたものであると推測される。その門閥関係解消のための離婚と捉えれば、先に述べた「官僚体制への批判」と考えることができる。

以上二点が「舞姫」を発表した主な背景ではないかと考えられる。また、これらの理由とは別に、「エリスへの贖罪」として書いたのではないかと考えられる。彼が独逸で愛したにも関わらず、日本にまで追ってきた彼女を突き返した鷗外。そして、その事実にも多少の想像を加え、完全に豊太郎、つまり、鷗外自身を悪役として描いた作品。さらには、「舞姫」発表後、彼に集中した非難に対し、一切の反論・発言をしなかつた鷗外の姿。これらのことから、そのような理由もあつたのではないかと考えられる。